

野分

渋谷栄一訳

第一章 夕霧の物語 継母垣間見の物語

「第一段 八月野分の襲来」

中宮のお庭先に、秋の花をお植えあそばしていらつしやることは、例年よりも見る価値が多くあつて、ありとあらゆる種類の花を植えて、風情のある皮のある木と皮をはいだ木との籬垣を結び混せて、同じ花の枝ぶりや姿は、朝夕の露の光も世間のと違つて、玉かと輝いて、お造りになつた野辺の色彩を見ると、一方では、春の山もつい忘れられて、さわやかで気分が晴々するようで、心も浮き立つほどである。

春秋の優劣に、昔から秋に心を寄せる人は数多くいたが、名高い春のお庭先の花園に心を寄せた人々が、再び掌を返すように秋に心変わりする様子は、時勢におもねる世情と似ていた。

この庭をお気に召して、里住みなさつていらつしやる間に、管弦のお遊びなども催したいところであるが、八月は故前坊の御忌月にあたるので、気になさりながら毎日過ごしていらつしやつたが、この花の色がいよいよ美しくなつていく様子を御覧になつてみると、野分が、いつもの年よりも激しく、空も変わつて風が吹き出す。

いろいろの花が萎れるのを、それほどにも思わない人でさえも、まあ、困つたことと心を痛めるのに、まして、草むらの露の玉が乱れるにつれて、お気もどうにかなつてしまひそうに「心配あそばしていらつしやつた。大空を覆つほどの袖は、秋の空にこそ欲しい感じがした。日が暮れて行くにつれて、何も見えないほど吹き荒れて、たいそう気味が悪いなので、御格子な

どをお下ろしになつたが、不安でたまらないと花の身を「心配あそばす。

「第二段 夕霧、紫の上を垣間見る」

南の御殿でも、お庭先の植え込みを手入れさせていらつしやつたちよつどそのころ、このように野分が吹き出して、株もまばらな小萩が、待つていた風にしては激し過ぎる吹き具合である。枝も折れ曲がつて、露も結ばないほど吹き散らすのを、少し端近くに出て御覧になる。

大臣は、姫君のお側にいらつしやつた時に、中将の君が参上なさつて、東の渡殿の小障子の上から、妻戸の開いている隙間を、何気なく覗き込みなされると、女房たちが大勢見えるので、立ち止まつて、音を立てないで見る。御屏風も、風がひどく吹いたので、押したたんで隅に寄せてあるので、すっかり見通せる廂の御座所に座つていらつしやる方、他の人と間違えようもない、気高く清らかで、ぱつと輝く感じがして、春の曙の霞の間から、美しい樺桜が咲き乱れているのを感じる。どうにもならぬほど、拝見している自分の顔にもふりかかつてくるように、魅力的な美しさが一面に広がつて、二人といないご立派な方のお姿である。

御簾の吹き上げられるのを、女房たちが押さえて、どうしたのであろうか、につこりとなさつていのが、何とも美しく見える。いろいろな花を心配なさつて、見捨てて中にお入りになることができない。お側に仕える女房たちも、それぞれにこざつぱりとした姿に見えるが、目が止まるはずもない。

「大臣がたいそう遠ざけていらつしやるのは、このように見る人が心を動かさずにはいられないお美しさなので、用心深いご性質から、万一、このようなことがあつてはいけないと、ご懸念になつていたので」

と思うと、何となく恐ろしい気がして、立ち去ろうとする、その時、西のお部屋から、内の御障子を引き開けてお越しになる。

「とてもひどい、気ぜわしい風ですね。御格子を下ろしなさいよ。男たちがいるだろつに、丸見えになつては大変だ」

と申し上げなされるのを、再び近寄つて見ると、何か申し上げて、大臣もにつこりしてお顔を拝していらつしやる。親とも思われず、若々しく美し

く優雅で、素晴らしい盛りのお姿である。

女もすっかり成人なさつて、何一つ不足のないお二方のご様子であるのを、身にしてみても美しく感じられるが、この渡殿の格子も風が吹き放つて、立っている所が丸見えになつたので、恐ろしくなつて立ち退いた。今ちよつと参上したように咳払いして、簀子の方に歩き出しなされると、

「そらごらん。見えたかもしれない」

とおつしやつて、あの妻戸が開いていたことよ」と、今見てお気づきになる。

「長年このようなことはちつともなかつたものを。風は、ほんとうに巖も吹き上げてしまうものなのだなあ。あれほどご用心の深い方々のお心を騒がせて。珍しく嬉しい目を見たものだ」と思わずにはいられない。

「第三段 夕霧、三條宮邸へ赴く」

家司たちが参上して、

「たいそうひどい勢いになりそうでございます。丑寅の方角から吹いて来ますので、こちらのお庭先は静かなのです。馬場殿や南の釣殿などは危なせうです」

と申して、あれこれと作業に大わらわとなる。

「中将は、どこから参つたのか」

「三條宮におりましたが、風が激しくなるだろう」と、人々が申しましたので、気がかりで参上いたしました。あちらでは、ここ以上に心細く、風の音も、今ではかえつて幼い子供のように恐がつていらつしやるようなので。おいたわしいので、失礼いたします」

とご挨拶申し上げなされると、

「なるほど、早く、行って上げなさい。年をとるにつれて、再び子供のようになることは、まったく考えられないことだが、なるほど、老人はそうしたものだ」

などと、ご同情申し上げなさつて、

「このように風が騒がしそうですけれども、この朝臣がお側におりましたらばと、存じまして代わらせました」

と、お手紙をお託しになる。

道中、激しく吹き荒れる風だが、几帳面でいらつしやる君なので、三條宮と六條院とに参上して、お目通りなさらぬ日はない。内裏の御物忌みなどで、どうしてもやむを得ず宿直しなければならぬ日以外は、忙しい公事や、節会などの、時間がかかり、用事が多い時に重なつても、真つ先にこの院に参上して、三條宮からご出仕なさつたので、まして今日は、このような空模様によつて、風より先に立つてあちこち動き回るのは、孝心深そうに見える。

大宮は、たいそう嬉しく頼もしくお待ち受けになつて、

「この年になるまで、いまだこのように激しい野分には遭わなかつた」

と、ただ震えに震えてばかりいらつしやる。

大きな木の枝などが折れる音も、たいそう気味が悪い。御殿の瓦まで残らず吹き飛ばすので、

「よくぞおいで下さいましたこと」

と、脅えながらも挨拶なされる。あれほど盛んだったご威勢も今はひっそりとして、この君一人を頼りに思つていらつしやるのは、無常な世の中である。今でも世間一般のご声望が衰えていらつしやることはないけれども、内の大殿のご態度は、親子であるのかえつて疎遠のようであつたのだ。

中将は、一晚中激しい風の音の中でも、何となくせつなく悲しい気持ちがある。心にかけて恋しいと思つていた人のことは、ついさしおかれて、先程の御面影が忘れられないのを、

「これは、どうしたことだろう。だいそれた料簡を持つたら大変だ。とても恐ろしいことだ」

と、自分自身で気を紛らわして、他の事に考えを移したが、やはり、思はず御面影がちらつては、

「過去にも将来にも、めつたにいない素晴らしい方でいらつしやつたなあ。このような素晴らしいご夫婦仲に、どうして東の御方が、夫人の一人として肩を並べなさつたのだろうか。比べようもないことだな。ああ、お気の毒な」とつい思わずにはいられない。大臣のお気持ちをご立派だとお分かりになる。

人柄がたいそう誠実なので、不相応なことを考えはしないが、あのよう

な美しい方とこそ、同じ結婚をするなら、妻にして暮らしたいものだ。限りのある寿命も、きつとも少しは延びるだろう」と、自然と思ひ続けられる。

「第四段 夕霧、暁方に六条院へ戻る」

明け方に風が少し湿りを含んで、雨が村雨のように降り出す。

「六条院では、離れている建物が幾棟か倒れた」

などと人々が申す。

「風が吹き巻いているうちは、広々とはなはだ高い感じのする六条院には、家司たちは、殿のいらっしやる御殿あたりには大勢詰めていようが、東の町などは、人少なで心細く思つていらっしやることだろう」

とお気づきになって、まだ夜がほんのりとする時分に参上なさる。

道中、横なぐりの雨がとても冷たく吹き込んでくる。空模様も恐ろしいつえに、妙に魂も抜け出たような感じがして、

「どつしたことが。更に自分の心に物思ひが加わつたことよ」と思ひ出すと、まことに似つかわしくないことであるよ。ああ、氣違ひじみている」

と、あれやこれやと思ひながら、東の御方にまず参上なさると、脅えきつていらっしやつたところなるので、いろいろとお慰め申して、人を呼んで、あちこち修繕すべきことを命じ置いて、南の御殿に参上なさると、まだ御格子も上げていない。

いらっしやる近くの高欄に寄り掛かつて、見渡すと、築山の多数の木を吹き倒して、枝がたくさん折れて落ちていた。草むらは言うまでもなく、松皮、瓦、あちこちの立部、透垣などのような物までが散乱していた。

日がわずかに差したところ、悲しい顔をしていた庭の露がきらきらと光つて、空はたいそう冷え冷えと霧がかかっているの、何とはなしに涙が落ちるのを、拭い隠して、咳払いをなさると、

「中将が挨拶しているようだ。夜はまだ深いことだろうな」

とおっしゃって、お起きになる様子である。何事であるうか、お話し申し上げなさる声はしないので、大臣がお笑いになって、

「昔でさえ味わわせることのなかつた、暁の別れですよ。今になって経験なせるのは、つらいことですよ」

とおっしゃって、しばらくの間仲睦まじくお語りになつていらっしやるお二方のご様子は、たいそう優雅である。女のお返事は聞こえないが、かすかながら、このように冗談を申し上げなさる言葉の様子から、水も漏らさないご夫婦仲だな」と、聞いていらっしやつた。

「第五段 源氏、夕霧と語る」

御格子をご自身でお上げになるので、あまりに近くにいたのが具合悪く、退いて控えていらっしやる。

「どつであつた。昨夜は、大宮はお待ちかねでお喜びになつたか」

「はい。ちよつとしたことにつけても、涙もろくいらっしやいますので、たいそう困つたことでございます」

と申し上げなさると、お笑いになって、

「もつ先も長くはいらっしやるまい。ねんごろにお世話して上げるがよい。内大臣は、こまかい情愛がないと、愚痴をこぼしていらっしやつた。人柄は妙に派手で、男性的過ぎて、親に対する孝養なども、見ための立派さばかりを重んじて、世間の人の目を驚かそうところがあつて、心底のしみじみとした深い情愛はない方であつた。それはそれとして、物事に思慮深く、たいそう賢明な方で、この末世では過ぎたほど学問も並ぶ者がなく、閉口するほどだが。人間として、このように欠点のないことは難しいことだなあ」

などとおっしゃる。

「たいそうひどい風だつたが、中宮の御方には、しっかりした官司などは控えていただろうか」

とおっしゃって、この中将の君を使者として、お見舞を差し上げなさる。

「昨夜の風の音は、どのようにお聞きあそばしましたでしょうか。吹き荒れていましたが、あいにく風邪をひきまして、とてもつらいので、休んでいたところでございました」

とご伝言申し上げます。

「第六段 夕霧、中宮を見舞う」

中将は御前を辞して、中の廊の戸を通つて、参上なさる。朝日をうけたお姿は、とても立派で素晴らしい。東の対の南の側に立つて、寢殿の方を遥かに御覧になると、御格子は、まだ二間ほど上げたばかりで、かすかな朝日の中に、御簾を巻き上げて、女房たちが座っていた。

高欄にいく人も寄り掛かっている、若々しい女房ばかりが大勢見える。気を許している姿はどんなものであろうか、はつきり見えない早朝では、色とりどりの衣装を着た姿は、どれもこれも美しく見えるものである。

童女を庭にお下ろしになって、いくつもの虫籠に露をおやりになつていらつしやるのであつた。紫苑、撫子、濃い薄い色の袖の上に、女郎花の汗衫などのような、季節にふさわしい衣装で、四、五人連れ立つて、あちらこちらの草むらに近づいて、色とりどりの虫籠をいくつも持ち歩いて、撫子などの、たいそう可憐な枝をいくつも取つて参上する、その霧の中に見える隠れる姿は、たいそう優艶に見えるのであつた。

あとから吹いて来る追風は、紫苑の花すべてが匂う空も、薫物の香も、お触れになつた御移り香のせいかと、想像されるのもまことにみごとなので、つい緊張されて、御前に進みにくいけれども、小声で咳払いして、お歩き出しになると、女房たちははつきりと驚いた顔ではないが、皆奥に入つてしまつた。

御入内されたころなどは、子供だつたので、御簾の中によくお入りになつていたので、女房なども、たいしてよそよそしくはない。お見舞いを言上させなされて、宰相の君や、内侍などのいる様子がするので、私事も小声でお話しになる。こちらはこちらで、何といつても、気品高く暮らしていらつしやる様子を見るにつけ、さまざまなことが思い出される。

第二章 光源氏の物語 六条院の女方を見舞う物語

「第一段 源氏、中宮を見舞う」

南の御殿では、御格子をすつかり上げて、昨夜、見捨てることのできなかつた花々が、見るかげもなく萎れて倒れているのを御覧になつた。中将が、御階にお座りになつて、お返事を申し上げなさる。

「激しい風を防いでくださいませうかと、子供のように心細がつておりましたが、今はもう安心しました」

と申し上げなさると、

「妙に気が弱くいらつしやる宮だ。女ばかりでは、空恐ろしくお思いであつたに違いない昨夜の様子だつたから、おつしやる通り、不親切だとお思ひになつたことであらう」

とおつしやつて、すぐに参上なさる。御直衣などをお召しにならうとして、御簾を引き上げてお入りになる時、低い御几帳を引き寄せて、わずかに見えたお袖口は、きつとあの方であらう」と思つと、胸がどきどきと高鳴る気がするの、いやな感じなので、他の方へ視線をそらした。

殿が御鏡などを御覧になつて、小声で、

「中将の朝の姿は、美しいな。今はまだ、子供のはずなのに、不体裁でなく見えるのも、親心の迷いからであらうか」

と云つて、ご自分のお顔は、年を取らず美しいと御覧のようです。とてもたいそう気をおつかいになつて、

「中宮にお目にかかるのは、気後れする感じがします。特に人目につく趣味ありげなところも、お見えでない方だが、奥の深い感じがして何かと気をつかわされるお人柄も方です。とてもおつとりして女らしい感じですが、なにかおもちのようであらうしやいますよ」

とおつしやつて、外にお出になると、中将は物思ひに耽つて、すぐにはお気づきにならない様子で座つていらつしやつたので、察しのよい人のお目にはどのようなお映りになつたことが、引き返してきて、女君に、

「昨日、風の騒ぎに、中将はお隙見したのではないでしょう。あの妻戸が開いていたからね」

とおつしやる、お顔を赤らめて、

「どうして、そのようなことがございませう。渡殿の方には、人の物音もしませんでしたもの」

とお答え申し上げなさる。

「やはり、変だ」と独り言をおっしゃって、お渡りになりつた。

御簾の中にお入りになつてしまつたので、中将は、渡殿の戸口に女房たちのある様子でしたので近寄つて、冗談を言つたりするが、悩むことのあるこれが嘆かわしくて、いつもよりもしんみりとしていらつしやつた。

「第二段 源氏、明石御方を見舞う」

こちらから、そのまま北の町に抜けて、明石の御方をお見舞いになると、これといつた家司らしい人なども見え、もの馴れた下女どもが、草の中を分け歩いてゐる。童女などは、美しい相姿にくつろいで、心をこめて特別にお植えになつた龍胆や、朝顔の蔓が這いまつわつてゐる籬垣も、みな散り乱れてゐるのを、あれこれと引き出して、元の姿を求めているのである。

何となくもの悲しい気分、箏の琴をもてあそびながら、端近くに座つていらつしやるところに、御前駆の声がしたので、くつろいだ糊気のない不断着姿の上に、小袷を衣桁から引き下ろしてはおつて、きちんとして見せたのは、たいそう立派なものである。端の方にちよつとお座りになつて、風のお見舞いだけをおっしゃって、そつけなくお帰りになるのが、恨めしげである。

「ただ普通に萩の葉の上を通り過ぎて行く風の音も つらいわが身だけにしみいるような気がして」

とついで独り言をいふのであつた。

「第三段 源氏、玉鬘を見舞う」

西の対では、恐ろしく思つて夜をお明かしになつた、その影響で、寝過つて、今やつと鏡などを御覧になるのであつた。

「仰々しく先払い、するな」

とおつしやるので、特に音も立てないでお入りになる。屏風などもみな畳んで隅に寄せ、乱雑にしてあつたところに、日がぱあつと照らし出した

時、くつきりとした美しい様子をして座つていらつしやつた。その近くにお座りになつて、いつものように、風の見舞いにかこつけても同じように、厄介な冗談を申し上げなされるので、たまらなく嫌だわと思つて、

「このように情けないなので、昨夜の風と一緒に飛んで行ってしまいとうざいましたわ」

と、御機嫌を悪くなされると、たいそうおもしろそうにお笑いになつて、

「風と一緒に飛んで行かれるとは、軽々しいことでしょう。そうはいつても、落ち着くところがきつとあることでしょう。だんだんこのようなお気持ちが出てきたのですね。もっともなことです」

とおつしやるので、

「なるほど、ふと思つたままに申し上げてしまつたわ」

とお思ひになつて、自分自身でもほほ笑んでいらつしやるのが、とても美しい顔色であり、表情である。酸漿などというもののよにぶつくらとして、髪のかかつた隙間から見える頬の色艶が美しく見える。目もとのほがらか過ぎる感じが、特に上品とは見えなかつたのであつた。その他は、少しも欠点のつけようがなかつた。

「第四段 夕霧、源氏と玉鬘を垣間見る」

中将は、たいそう親しげにお話し申し上げていらつしやるのを、何とかこの姫君のご器量を見たいものだ」と思い続けていたので、隅の間の御簾を、その奥に几帳は立ててあつたがきちんとしていなかつたので、静かに引き上げて中を見ると、じゃま物が片づけてあつたので、たいそうよく見える。このようにぶざけていらつしやる様子がはつきりわかるので、

「妙なことだ。親子とは申せ、このように懐に抱かれるほど、馴れ馴れしくしてよいものだろうか」

と目がとまつた。「見つけられはしまいか」と恐ろしいけれども、変なので、びっくりして、なおも見てゐると、柱の陰に少し隠れていらつしやつたのを、引き寄せなされると、御髪が横になびいて、はらはらとこぼれかつたところ、女も、とても嫌でつらいと思つていらつしやる様子ながら、それでも穏やかな態度で、寄り掛かつていらつしやるのは、

「すっかり親密な仲になつていらつしい。いやはや、ああひどい。どうした
ことであるうか。抜け目なくいらつしやるご性分だから、最初からお育て
にならなかつた娘には、このようなお思いも加わるのだから。もつともな
ことだが、ああ、嫌だ」

と思つ自分自身までが気恥ずかしい。女のご様子は、なるほど、姉弟と
いつても、少し縁遠くて、異母姉弟なのだ」などと思つと、どうして、心
得違ひを起さないだらうか」と思われる。

昨日拝見した方のご様子には、どこか劣つて見えるが、一目見ればにっ
こりしてしまうところは、肩も並べられそうに見える。八重山吹の花が咲
き乱れた盛りに、露の置いた夕映えのようだと、ふと思ひ浮かべずにはい
られない。季節に合わないたとえだが、やはり、そのように思われるので
あるよ。花は美しいといつても限りがあり、ばらばらになつた薬などが混
じつてゐることもあるが、姫君のお姿の美しさは、たとえようもないもの
なのであつた。

御前には女房も出て来ず、たいそう親密に小声で話し合つていらつしや
つたが、どうしたのであるうか、真面目な顔つきでお立ち上がりになる。女
君は、

「吹き乱す風のせいで女郎花は 萎れてしまいそうな気持ちがいけません」
はつきりとは聞こえないが、お口ずさみになるのをかすかに聞くと、憎
らしい気がする一方で興味がわくので、やはり最後まで見届たいが、近く
にいたなと悟られ申すまい」と思つて、立ち去つた。

お返歌は、
「下葉の露になびいたならば 女郎花は荒い風には萎れないでしょうに な
よ竹を御覧なさい」
などと、聞き間違ひであるうか、あまり聞きよい歌ではない。

「第五段 源氏、花散里を見舞つ」

東の御方へ、ここからお渡りになる。今朝の寒さのせいで内輪の仕事で
あるうか、裁縫などをする老女房たちが御前に大勢いて、細櫃らしい物に、
真綿をひっかけ延ばしてゐる若い女房たちもいる。とても美しい朽葉色の

羅や、流行色でみごとに艶出ししたなどを、ひき散らかしていらつしや
つた。

「中将の下襲か。御前での壺前裁の宴もきつと中止になるだろう。このように
吹き散らしたのでは、何の催し事ができようか。興ざめな秋になりそうだ」
などとおつしやつて、何の着物であるうか、さまざまな衣装の色が、と
ても美しいので、このような技術は南の上にも負けない」とお思いになる。
御直衣、花文綾を、近頃摘んできた花で、薄く染め出しなつたのは、た
いそう申し分ない色をしていた。

「中将にこそ、このようなのをお着せなさるがよい。若い人の直衣として無
難でしょう」

などというようなことを申し上げなつて、お渡りになつた。

第三章 夕霧の物語 幼恋の物語

「第一段 夕霧、雲井雁に手紙を書く」

気疲れのする方々をお回りになるお供をして歩いて、中将は、何となく
気持ち晴れず、書きたい手紙など、日が高くなつてしまつたのを心配しな
がら、姫君のお部屋に参上なつた。

「まだあちらにおいてあそばします。風をお恐がりあそばして、今朝はお起
きになれませんでしたこと」

と、御乳母が申し上げる。

「ひどい荒れようでしたから、宿直しようと思つて存じましたが、宮が、たいそう
恐がつていらつしやつたものですから。お雛様の御殿は、いかがでいらつ
しやいましたか」

とお尋ねになると、女房たちは笑つて、

「扇の風でさえ吹けば、たいへんなことにお思いになつてゐるのを、危つく
吹き壊されるところでございしました。この御殿のお世話に、困りつており
ます」などと話す。

「大げさでない紙はありませんか。お伺の硯を」

とお求めになると、御厨子に近寄つて、紙一卷を、御硯箱の蓋に載せて差し上げたので、

「いや、これは恐れ多い」

とおつしやるが、北の御殿の世評を考えれば、そう気をつかうほどでもない気がして、手紙をお書きになる。

紫の薄様の紙であつた。墨は、ていねいにすつて、筆先を見い見いして、念を入れて書きながら筆を休めていらつしやるのが、とても素晴らしい。けれども、妙に型にはまつて、感心しない詠みぶりであつた。

「風が騒いでむら雲が乱れる夕べにも 片時の間もなく忘れることのできな
いあなたです」

風に吹き乱れた刈萱にお付けになつたので、女房たちは、

「交野の少将は、紙の色と同じ色の物に揃えましたよ」と申し上げる。

「それくらいの色も考えつかなくつたな。どこの野の花を付けようか」
などと、このような女房たちにも、言葉少なに対応して、気を許すふうもなく、とてもきまじめで気品がある。

もう一通お書きになつて、右馬助にお渡しになつたので、美しい童や、またたいそう心得ている御隨身などに、ひそひそとささやいて渡すのを、若い女房たちは、ひどく知りたがつている。

「第二段 夕霧、明石姫君を垣間見る」

お戻りあそばすというので、女房たちがざわめき、几帳を元に直したりする。先ほど見た花の顔たちと、比べて見たくて、いつもは覗き見など関心もない人なのに、無理に、妻戸の御簾に身体を入れて、几帳の隙間を見ると、物陰から、ちよつとどいざつていらつしやるところが、ふと目に入った。女房が大勢行つたり来たりするので、はつきりわからないほどなので、たいそうじれたい。薄紫色のお召物に、髪がまだ背丈には届いていない末の広がつたような感じで、たいそう細く小さい身体つきが可憐でいらしい。「一昨年ぐらゐまでは、偶然にもちらつとお姿を拝見したが、またすつかり成長なさつたようだ。まして盛りになつたらどんなに美しいだろう」と思う。「あの前に見た方々を、桜や山吹と言つたら、この方は藤の花と言つべきで

あるうか。木高い木から咲きかかつて、風になびいている美しさは、ちよつとこのような感じだ」と思い比べられる。「このような方々を、思いのままに毎日拝見していたいものだ。そうあつてもよい身内の間柄なのに、事に隔てを置いて敵しいのが恨めしいことだ」などと思つと、誠実な心も、何やら落ち着かない気がする。

「第三段 内大臣、大宮を訪つ」

祖母宮のお側に参上なさると、静かにお勤めをなさつてゐる。まずまずの若い女房などは、こちらにも伺候しているが、物腰や様子、衣装なども栄華を極めてゐる所とは比較にもならない。器量のよい尼君たちが、墨染の衣装で質素にしているのが、かえつてこのような所では、それなりにしみみとした感じがするのであつた。

内大臣も参上なさつたので、御殿油などを灯して、のんびりとお話など申し上げになさる。

「姫君に久しくお目にかからないのが情けないこと」

とおつしやつて、ただひたすらお泣きになる。

「もつすぐこちらに参上させましよう。自分からふさぎ込んでいます、惜しいことに痩せてしまつてゐるようです。女の子は、はつきり申せば、持つべきではございませんでした。何かにつけて、心配ばかりさせられました」
などと、依然として不快にこだわつてゐる様子であつしやるので、情けなくて、せひにもお申し上げなさらない。その話の折に、

「たいそう不出来な娘を持ちまして、手を焼いてしまいました」

と、愚痴をおこぼしになつて、にが笑いなさる。宮、

「まあ、変ですこと。あなたの娘という以上、出来の悪いことがありましようか」

とおつしやる。

「それが体裁の悪いことなのでございます。せひ、御覧に入りたいものです」と申し上げなさつたとか。

